
世界遺産
白川郷
視線の先にあるもの

黒田乃生 著

筑波大学出版会

はじめに

「白川郷、今テレビでやってるよ!」「昨日の新聞にライトアップが出ていたね」筆者が白川村の研究をしていることを知っていて、親戚や友人がしょっちゅう知らせてくれる。「あの民宿の人とはとても仲良しなの」「ライトアップは役場や荻町の人が総出でやっているんだよ」と、こちらも自慢である。こんなふうには、世界遺産の「白川郷」はちょっとしたスターになった。インターネットの普及で今や世界中の人が「白川郷」の景色や情報をリアルタイムで知ることができる。「白川郷」というスターのイメージが良くも悪くも空中を飛び交っていると考えてよいだろう。

「白川郷」がスター街道を駆け上がったのは「世界遺産」という強力な追い風があったからなのだが、世界遺産登録の前に長い助走区間があったことはあまり知られていない。本書では助走区間を含め白川村という岐阜県の農村を舞台にその長い歴史の中で「世界遺産」がどのような位置付けにあるのかをいくつかの角度からとらえたいと思う。「世界遺産」を語るにはそのなかにどっぷり浸かって自らの視線でその功罪を指摘するという方法ももちろんあるのだが、少し引いて村の全体像を俯瞰しながら見ていくことにする。その俯瞰景のなかに世界遺産がもたらしたものは何か、本書を読んだ方

がぼんやりとイメージできれば良いかと考えている。

また、俯瞰するためにさまざまな人たちの「視線」を借りたいとも考えている。世界遺産というのは実体よりもむしろ情報として世界に喧伝される「像」（イメージ）の部分が大い。たとえば「世界遺産白川郷」と言われたときに、どのような像が頭の中に浮かぶだろうか。今なら大きな合掌造りの建物やそれがたくさん連なっている集落の姿を思い浮かべる人が多いにちがいない。しかし、こうした「白川郷」の像は昭和の後半になってから現れてきたものである。もちろん、合掌造りの建物自体は近世からずっとあったわけだが、時代の興味によってその時々人々の目に映るものは変化を続けて今に至っている。さらに、現在の白川郷で同じ合掌造りの建物を見ても、住んでいる人にとっては日常生活の場、訪問者にとっては観光旅行の撮影対象、研究者にとっては分析の対象、文化財の関係者にとっては保護の対象と立場や背景によってとらえ方は多様である。本書ではこのようなさまざまな立場の人や時には「世の中」という想像の主体を借りながらそれらの視線のさきにあるものをとらえていきたいと思う。

平成十九年八月

黒田乃生